

## 韓国における低出産・高齢化，国内・国際人口移動と政策的対応に関する資料収集

厚生労働科学研究費による研究事業「東アジア，ASEAN 諸国の人口高齢化と人口移動に関する総合的研究」の一環として，林玲子・国際関係部長と筆者が2月10日～13日にかけて韓国に出張し，専門家との意見交換と資料収集を行った。面談した専門家は，李三植・韓国保健社会研究院低出産高齢化対策企画団団長，李尚林・同院副研究委員，李召英・同院副研究委員，曹成虎・同院副研究委員，姜裕求・同院国際協力センター長，朴京淑・ソウル大学校社会学科教授，이석규・OECD 韓国政策センター保健社会政策プログラム局長，조경숙・OECD 韓国政策センター保健社会政策プログラム部長，金道勲・韓国国民健康保険公団中涼支社部長，金斗燮・韓国漢陽大学社会学科教授らである。

韓国保健社会研究院は，首都機能の一部移転に伴い2014年12月に世宗特別自治市へ移転した。移転したのは国務総理室をはじめ企画財政部・保健福祉部・教育部など36の中央行政機関と16の所属機関，韓国保健社会研究院を含む14の研究機関などである。これはソウル首都圏への一極集中を緩和し，人口分布を是正することを目的とした政策で，東京一極集中が問題視され地域活性化に注力する日本にとって非常に参考になる事例である。実際に住宅や交通インフラが急速に整備されつつある現場を目撃できたが，ソウルに住宅を残し二重生活を送る職員も多いとのことであった。首都機能でも大統領府をはじめ法務部，国防部，外交部，統一部などはソウルに残された。内政機能中心の首都移転が人口分布にどの程度影響し得るかは，数年の観察期間が必要と思われる。

(鈴木 透 記)

## 日本人口学会関西地域部会2015年度研究会

2016年3月5日(土)京都市・総合地球環境学研究所にて日本人口学会関西地域部会2015年度研究会が開催された。H-GIS研究会(京都大学地域研究統合情報センター)との共催であり，GIS(地理情報システム)をどのように人口分析に用いるか，特に歴史人口データをGISにどのように落とし込んでいくか，また地理情報のみならず，時間情報やテキスト情報をどのように処理するか，といった情報学最先端の研究が報告された。また，医療・公衆衛生分野の内外の資料をどのようにアーカイブしていくのか，感染症のモデリング手法についてなどそれぞれ興味深い報告と議論が行われた。学会活動は東京一極集中ではないことを十分に満喫できる地域部会であった。

(林 玲子 記)

## 日本地理学会2016年春季学術大会

日本地理学会2016年春季学術大会が2016年3月20日～23日(23日は巡検のみ)に早稲田大学早稲田キャンパス(東京都新宿区)において開催された。22日には人口関係のセッションが設けられた。都合により22日の一部の研究発表しか聴講できなかったが，人口に関する主な発表について紹介する。

発表では，東京大学の桐村からは市区町村よりも小さな小地域における長期の人口変動を観察する方法として，全国学校総覧に注目して児童数の変化から人口変化を把握する手法，埼玉大学の中川からはオーストリア内で19世紀以降人口増加が継続しているチロル地方に関して，観光産業の発達とコーホート変化の推移についての報告などが見られた。以下に，人口関係の発表を列挙しておく。

- 非大都市圏におけるコーホートの人口変動と人口規模……清水昌人（国立社会保障・人口問題研）  
 長期的な人口変動の分析への『全国学校総覧』の利用可能性—1960～2015年の大阪府の事例  
 ……………桐村 喬（東京大学）
- 1930年代の東京市における工業立地，郊外化および通勤流動の関係 ……………谷 謙二（埼玉大学）
- カンボジアにおける英語教育サービスの成長とフィリピン人教師の出稼ぎ  
 ……………広田麻未（横浜国立大学・院）
- ドイツにおける日本人向け人材会社の活動 ……………由井義通\*（広島大学）・神谷浩夫（金沢大学）
- オーストリア・チロル州における人口動態……………中川聡史（埼玉大学）  
 （貴志匡博 記）

## アメリカ人口学会2016年大会

3月31日～4月2日にかけて，アメリカ人口学会（PAA：Population Association of America）の2016年大会がワシントン DC にて開催された。本学会は，224の口頭報告セッション（各4報告）と11のポスターセッション（各100報告）からなる。様々なテーマについての報告が2日半の短い日程に凝縮され，会場はさながら年に一度の人口学のお祭りのような雰囲気にも包まれる。PAAの規模と質の高さは，人口学の学会として突出しており，世界の人口学における研究動向を知る上で重要な機会となっている。

当研究所からは，別府志海情報調査分析部室長，是川夕人口動向研究部主任研究官，余田翔平人口動向研究部研究員と筆者の4名が参加した。ポスターセッションにて，是川主任研究官が“Educational Attainment and Its Determinants of Immigrant Children in Japan: Focusing on High School Enrollment”，“Why Immigrant Women's Fertilities Are Lower Than That of the Native Women: An Analysis from the Own-Children Method Using the Micro-Data of the Japanese Population Census”の報告を，余田研究員が“Parental Divorce and Adolescents' Educational Outcomes in Japan”の報告を行った。筆者は今回は本大会での報告ではなく，昨年8月に参加したBerkeley Workshop on Formal DemographyのReception and Poster SessionというMember-Initiated meetingにて，“Counting Women's Work in Japan”という日本のNTA（National Transfer Account）ならびにNTTA（National Time Transfer Account）に関する報告を行った。

PAAでは，学会の場を利用して様々な団体が自発的な集まりを催している。Invited onlyの集まりもあるが，一般会員に公開されているセミナーやワークショップも多くある。例えば，今大会ではアメリカで最も長い歴史を持つパネル調査であるPanel Study of Income Dynamicsがユーザーに向けた説明会を開いていた。1968年に始まった世帯パネル調査がいまだ現役でデータ収集を続けていること自体驚きであるが，このような巨大なデータの分析は容易ではない（変数のみで8万を超える）。今回の説明会ではデータの構造や調査事項，世帯員の追跡ルールなどについて，実査に関わる研究者から丁寧な解説がなされた。また，Guttmacher Instituteの主催による“Ask Editors: Getting Published in Peer-Reviewed Journals”といわれるセミナーでは，人口学の有名雑誌の編集者を招き，どのような論文がAcceptされやすいのかについて話を聞く機会を提供していた。さらに同Instituteは“Using Research to Inform and Advance the Domestic Sexual and Reproductive Health and Rights Policy Debate”と題したセミナーも同時開催しており，政策議論に貢献する研究のあり方などが議論された。ともすると，見落としがちであるが，PAAに参加する際には，このようなセミナーやワークショップを覗いてみると思わぬ収穫があるかもしれない。

（福田節也 記）